

大母音推移で学ぶ母音体系の特性

南 佑 亮

1. はじめに

大母音推移(The Great Vowel Shift)といえば英語の内面史上最大の事件の一つであり、古今の英語史概説書には必ずといっていいほど載っている。近年、英語史の知見に関する啓蒙的活動で国内随一の活躍をされている堀田隆一氏が最近自身のブログ記事において提示した「英語史ミニマムエッセンシャル私案」¹では、「綴り字と発音」という大項目の下に「大母音推移」が含まれている。外国語としての英語教育・学習に英語史の知見を活かすことを試みた Schmitt and Marsden (2006) では、音声に関する章(“The Sounds of English”)において、30 数ページ中、約 4 ページが大母音推移の解説に割かれている。このように、大母音推移を理解することが外国語としての現代英語をよりよく理解し学習することに貢献するという考え自体は決して珍しいことではない。しかし、そのような考えに基づいて大母音推移が引き合いに出される場合、この大規模な変化がもたらした帰結(結果)が主題となることが多く、変化の「過程」についてはあまり光が当たらない傾向にある。そこで本稿では、大母音推移のプロセスが、体系的な母音の音変化という特徴を有していたことに着目することもまた、母音の理解・習得にとって重要かつ有用である可能性を探ってみたい。

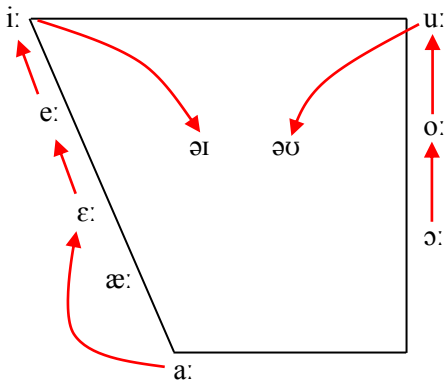
本稿の構成は以下の通りである。2 節では、先行研究の知見に基づき、大母音推移の変化の概要と、大母音推移がもたらした様々な帰結について概観する。3 節では、母音の音変化は一定の原理にしたがって体系的に生じるということを理解し、それが変種間の母音体系のバリエーションの理解・習得に応用できる可能性について論じる。4 節は結語である。

2. 大母音推移の概要とその帰結

2.1 概要

大母音推移は、1400年～1700年頃にかけてブリテン島内で起こった、強勢を伴うすべての長母音が、母音四辺形上で1段（ときに2段）上昇する（あるいは二重母音化する）という、大規模な音変化のことを指す（図1参照）。

図1 母音四辺形に表示した大母音推移のプロセス



(<http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2009-11-18-1.html> の図に基づき作成)

大母音推移は、言語音の変化としてはかなりスピードが速いほうであると言われるものの、決して全体が一樣に、一足飛びに起こった変化ではなく、異なる時機・速度・一貫性で生じた変化であったようである (Lass 2006: 82, 堀田 2011: 120)。しかし、変化の全体を俯瞰する限り大母音推移は非常に体系的な変化であったことは、表1にあるような単語ごとの母音変化の例からもうかがえる。

The Great Vowel Shift				Later Development		
14 th Century		17 th Century		21 st Century		
tim	i:	>	əɪ	→	aɪ	time
grene	e:	>	i:	=	i:	green
brek	ɛ:	>	e:	→	eɪ	break
nam	æ:	>	ɛ:	→	eɪ	name
boote	ɔ:	>	o:	→	əʊ	boat
mone	o:	>	u:	=	u:	moon
hus	u:	>	əʊ	→	aʊ	house

表1 大母音推移とその後の母音の変化の例 (Schmitt and Marsden 2006: 130 の表を一部修正)

大母音推移の後にも母音はある程度変化していることがわかるが、母音の種類によって変化しているものと変化していないものがある。また、変化した母音についてもその変化の程度が母音ごとに一定していない。具体的には、すでに二重母音になっていたものの音質が一部変化したもの (time, house) もある一方で、単母音から二重母音化したもの (break, name, boat) もある。このような状況と比較すると、大母音推移の期間に起こった変化がいかに体系的で一貫性の高いものであったかが分かる。

以上が変化の概要であるが、大母音推移が実際にどのようにして起こったかについては諸説あり、決定的な結論は出ていないようである。その諸説のうち、概説書や事典で最も紹介されるのは「引き込み連鎖(drag chain)」説と「押し上げ連鎖(push chain)」説である(Crystal 2018: 55)。前者は、四辺形上で最上部に位置する母音、すなわち最も舌の位置が高い母音(/i:/と/u:/)が最初に二重母音化し、その空席を埋めるように下にある母音が順に一段ずつ上昇していった、という説である。一方、後者は、舌の最も下に位置する母音(/a:/と/o:/)が1段上昇することで、元々その位置を占めていた母音(/ɛ:/と/o:/)が押し出されて1段上昇し・・・というように、すべての母音が玉突きのように移動したという説である。どちらの方が正しいのか (あるいはどちらでもなく別の説が正しいのか) は本稿の守備範囲を超えた問題であるが、本稿が着目したいのは、どちらの説にも、大母音推移がきわめ

て体系的な音の変化であったという前提が共有されているということである。この点については3節で再び取り上げる。

2.2 帰結

大母音推移は、(A)綴り字と発音との乖離を促進し、(B) 英語の語彙の中に発音上の *odd couples* を生み出し、(C) 「量ではなく質」の母音体系をもたらしたとされる。以下、この3つの帰結について順に見ていく。

(A)について

綴り字と発音の間の対応関係の無秩序さは現代英語の際立つ特徴としてよく話題になるが、そのような特徴に大きく貢献したのが大母音推移であると言われる。これには、大母音推移が起こったタイミングの悪さ(*unfortunate timing*)が関係している(Schmitt and Marsden 2006: 131)。すなわち、大母音推移は、ちょうど綴り字が固定化されていく時期と重なってしまったのである。これほど大規模かつ体系的変化であるにも関わらず綴り字に反映させることがなかったため、母音と文字のあいだにいびつな対応関係が生じることとなり、ローマン・アルファベットの A や I の文字が二重母音(/eɪ/, /aɪ/)と呼ばれるという現象がもたらされた。² これにより、日本語母語話者が英語を第一外国語として学習したあとに第二外国語でドイツ語やフランス語など英語以外の欧州言語を学習した場合は、これらの文字の読み方の違いに戸惑うこととなる(筆者もそういう経験をした一人である)。

(B)について

(A)の帰結と連動したことであるが、大母音推移は英語の語彙の中に多数の奇妙な組み合わせ(*odd couples*)を生み出した。例を(1)に挙げる。

- (1) a. vine vs. ravine
 b. police vs. lice
 c. polite vs. elite (Schmitt and Marsden 2006: 132 より抜粋)

(1)に挙がっている3つのペアは全て i の文字を含むが、それぞれ音韻的環境が似ているにも関わらず、その発音の仕方が異なっている。vine, lice, polite の i は /aɪ/ と読むが、ravine, police, elite の i は /i:/ と読む。特に、police と polite は末尾の子

音が異なるだけであり、何も知らなければ i の文字と音価との対応関係はランダムに決まっているように思えるかもしれない。しかし実は、この複雑な状況は大母音推移によってもたらされたものである。/aɪ/と読む単語はすべて大母音推移の影響を受けたものだが、/i:/と読む単語は遅い時期に英語に借用されたために大母音推移の影響を受けず、借用元の言語（ラテン語やフランス語）における i の文字の「オーソドックスな」読み方が保持された。たとえば(1c)の場合、polite と elite はともに借用語だが、polite は 15 世紀初頭にラテン語から借用されたために大母音推移の影響を受けたのに対し、elite は 18 世紀にフランス語から借入されるまで英語には存在しなかったため、大母音推移の影響は全く受けていない。

(C)について

大母音推移は、英語の母音体系そのものを大きく変化させたが、この劇的変化は、大母音推移が「長母音」にだけ起こった変化であったことに起因すると言える。簡潔に言えば、長母音だけに起こった変化であるため、短母音には変化が起こらなかったということである。

良く知られているように、古英語では a, æ, e, i, o, u, y という 7 つの短母音すべてに対して、それぞれの音を長くした音素（長母音）のペアが存在していた（市河・松浪 1986: 2-3, Lass 2006: 53）。つまりこの時代の英語は、音質は同じだが音の長さ（量）の違いによって別の音素を作るタイプの母音体系であった。また中英語でもこのような音の量の違いによる対応関係は概ね保持されていたようである（Lass 2006: 63）。ところが大母音推移によって長母音だけが劇的に変化したためにこの長短母音の関係が崩れることとなり、結果として英語は、量（音の長さ）ではなくもっぱら音の質の違いで母音同士を弁別するようになった。これにより、現代英語においては、例えば bit と beat、full と fool といったミニマルペアが、母音の長短によるペアではなく音質が異なるペアとして認識されるようになっている。³

3. 母音の体系(system)を認識することの有用性について

2 節では、大母音推移に関連して一般的な英語史概説書で提示されている知見を確認した。明らかなのは、どの概説書も、大母音推移の変化の過程そのもの(2.1 節参照)よりも、大母音推移がもたらした帰結(2.2 節参照)の方に力点を置いているということである。大母音推移の起こった順序や原因がまだ明らかになって

いないことを考えると、このような傾向はある程度必然的なことなのことかもしれない。また、2.2 節で確認した 3 つの帰結は、そのまま現代英語の特徴をより良く理解することに直結するものばかりであり、英語教育・英語学習への貢献という点でも、過程より帰結の方に注目が集まりやすかったというのもうなずける。

しかし、実は大母音推移の変化の特性からも得るべきことがある。2.1 節でも少し触れたように、大母音推移はそれ自体が非常に体系的な変化である。この点については、実は Schmitt and Marsden (2006) にも以下のような指摘がある（最初の“such shifts”には大母音推移が含まれている）。

- (2) The key aspect of such shifts is not the individual changes in themselves. What matters is that the language's system of difference remains intact: The specific quality of a particular vowel in pronunciation is always less important than the difference between it and other vowels in the system. What is important in English is that the individual words in groups such as main, mean, moan, and moon or bane, been, bone, and boon should be distinguishable from each other. (そのような大規模な変化において重要な意味を持つのは個々の音の変化それ自体ではない。重要なのは、当の言語の差異の体系(system of difference)がそのまま保持されることである。特定の母音が具体的いかなる音質で発音されるかということは、当の母音とその他の母音が当該言語の母音体系内でどのように差異化(区別)されているかということに比べるとさほど重要なことではない。英語において重要なのは、main, mean, moan, moon または bane, been, bone, boon といった一連の語同士が(母音の音の違いによって)互いに区別できることなのである。) (Schmitt and Marsden 2006: 131; 下線および日本語訳は筆者による)

母音変化で重要なのは個々の音の変化よりもむしろ言語の差異の体系(system of difference)が保持されることであり、各母音がその他の母音と確実に区別が可能となり、母音のみの違いによって異なる単語の識別ができなくてはならないが、まさに大母音推移はこの差異の体系を保持するような変化だったわけである。同様の考えが、より一般的かつ洗練された形で Trudgill (2011) にもまとめられている。

- (3) An elementary and totally obvious fact about vocalic systems is that the whole point of a vowel is to be different from other vowels. Linguistic common sense would therefore dictate that, other things being equal, vowels should be as distinct from one another as possible. We would thus expect to find that, in any given language, vowels are distributed relatively evenly across vowel space. (母音体系について基本的かつ、非常に明白な事実といていいのは、ある母音の占める領域が他の母音とは重ならないようになっているということである。これはすなわち、他の条件が同じである限り、きちんとした言語活動を実現するという目的により、母音同士は互いにできる限り明確に区別される状態になるように仕向けられているということなのであろう。こうして、いかなる言語であれ、その言語の母音は母音空間内に比較的均一に分布するという予測が成立する。) (Trudgill 2011: 132-3 ; 日本語訳は筆者による)

ある言語の母音同士は、最も区別がしやすいように一母音間の差異が最大化されるように体系化されている。つまり、母音は母音空間の中を最大限使って、なるべく均一に分布しているはずである。これを Trudgill は弁別性の原理 (principle of distinctiveness) と呼ぶ。この原理がある以上、ある言語の母音体系内のどれか一つの母音に変化が生じたならば、その変化は他の母音に必ず影響を及ぼし、どのような変化をするにせよ、弁別性の原理に沿った形で変化をするはずであり、大母音推移もまさにこの原理に沿った変化をした一事例ということである。Trudgill は大母音推移がこの原理を体現するよく知られた例 (a well-known example) と述べるだけで詳しい説明はしていないが、確かに、押し上げ連鎖説・引き込み連鎖説のどちらの場合であれ、最初の長母音の変化を皮切りに他のすべての長母音が影響を受けて移動していることは容易に分かる。どちらの変化であれ、最初に起こった変化が弁別性の原理に反する状況を作り出すため、その状況を解消するために体系全体に連鎖的な変化が起こっているという図式は共通している。押し上げ連鎖の場合は、最初に上昇した母音と、上昇した位置を元々占めていた母音が同質の音になるため識別が困難になってしまう。引き込み連鎖の場合、最初に上舌母音が二重母音化したせいで、母音四辺形の最上部を占める母

音が空席になり、「差異を最大化するように均等に分布する」という原則に反することになる。いずれにせよ、不均衡な状況を解消するために、その後の変化が引き起こされている。

弁別性の原理は、「いかなる言語であれ、その言語の母音体系の中のどれか1つの母音にのみ変化が起こるといことは起こりえない」ということを論理的に含意する。つまり母音体系内のどこか一箇所でも変化が起これば、その他の部分にも相応の変化があるということである。この原理は、大母音推移は通時的なレベルで英語という言語に起こった変化を理解することにも非常に有効だが、実は共時的なレベルで同一言語の中の方言(dialects)の間の母音の変異(バリエーション)を捉える時にも有用であると考えられる。以下では、この観点から現代英語の変種の例を1つ取り上げておこう。

オーストラリア英語は、EFLにおいて学習者が手本とする容認発音(RP)や一般アメリカ英語(GAE)といった、標準的と見做される変種とは母音体系が異なることがよく知られている(以下、本稿では便宜上、RPを標準変種とする)。オーストラリア英語を標準変種と分かつ特徴としてとりわけよく取り上げられるのが、後者の /eɪ/ が前者における /aɪ/ に対応するという特徴である。⁴ /aɪ/ は日本語母語話者には「エイ」よりも「アイ」に近い音に聞こえるため、よく *I went to the hospital today.* が *I went to the hospital to die.* に聞こえるといった形でジョークの種になっていることもある。母音体系を特に意識していなければ特にこれ以上のことはないが、弁別性の原理の観点に立つと、すぐに1つ予測が生じる。つまり、オーストラリア英語の /aɪ/ は RP の /eɪ/ よりも /aɪ/ に音質が近くなるため、弁別性を最大化するという点ではオーストラリア英語の /aɪ/ に相当する音素は /aɪ/ よりもさらに /aɪ/ から距離の離れたものになっていることが予測される。事実にはたしてその予測通りになっていて、RPにおける /aɪ/ はオーストラリア英語では /oɪ/ となっている。

ここで、仮に RP からオーストラリア英語に母音体系が変化すると想定し、便宜上、後半の音質 /ɪ/ は変化せずに前半部分の音質だけが変化すると仮定してみよう。すると以下のような三段階の変化が浮かび上がる。大母音推移ほどの規模ではないものの、ある1つの母音の変化が別の母音の変化と連動しているという図式は同じである。

- ① RP の /e/ がいくらか下降して /a/ となったことによって、/a/ との距離が近づく。
- ② ①によって生じた弁別性のアンバランスを解消する必要が生じる。
- ③ ②の問題の解消のため、/a/ が /a/ から遠ざかるように後方へ移動し、/ɒ/ となる。

上の議論は、現実には①～③のような段階を踏んだ変化が歴史上どこかの時点で実際に起こったかどうかについての検証を念頭に置いたものではない。これはあくまでも英語学習者にとっての有用性を念頭に置いた、外国語学習の方法論上の提案である。このようなステップを想定すると、二つの変種の中の音の違いが体系的なレベルで生じていることが正しく把握できる。このように、「個々の母音はその言語（変種）内の母音体系の一部を成すため、一箇所の変化が体系内の他の母音に常に影響を及ぼす」という現象の理解の促進は、2.2 節で提示した(A)-(C)に勝るとも劣らず、大母音推移が英語学習に対して提供してくれている恩恵の一つに数えてよいと思われる。

4. 結語

本稿は、英語史上最大の事件の一つである大母音推移を取り上げ、この変化が現代英語に対してもたらした影響・帰結だけではなく、その変化が弁別性の原理に沿った体系的なものであったことを理解することの有用性を指摘した。具体的には、共時的に存在する異なる変種の母音体系の間に大母音推移のような体系的な変化を想定することで、個々の対応関係を個別に把握するよりも、両者の対応関係の理解を効率化できる可能性を示唆した。

どのようなレベルであれ、言語における一つの要素はすべて何らかの体系(system)の一部を成し、体系を構成する個々の要素は同一体系内のその他すべての構成要素との関係(差異)によって規定されているため、体系内の特定の構成要素の変化はその他すべての構成要素のありかたに影響を及ぼす。この考え方はまさしく、ソシュール流の構造主義(structuralism)に通ずるものがある。「構造主義」と言うのが古く聞こえるかもしれないが、言語の体系的側面に着目することが不可欠な研究対象は多数存在する。⁵ 例えば Haspelmath (2014) は数や時制などの文法的カテゴリーのための形態的マーカーの分布を説明するためには経済性の動機(economic motivation)だけではなく、それと競合関係にある体系圧(system

pressure)を考慮する必要があることを論じている。Lakoff (1987) はある構文 (construction) が言語体系 (linguistic system) 内の特定の生態的位置 (ecological location) を占め、他の構文群との関係によって規定されるという考えを明確に打ち出しており、これは近年の構文文法理論にも確実に受け継がれている (Diessel 2019)。本稿で論じた母音の変化やバリエーションも、言語の体系性(systematicity)を考慮する必要のある領域であると言えるだろう。

注

1. <http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hello/2021-12-13-1.html> (#4613. 「英語史ミニマムエッセンシャル私案」)
2. 発音は自然に変化していくものだが綴り字は人為的なものであるため、綴り字は発音の変化をリアルタイムで反映することはできず、宿命的な遅れが生じるというのは一般的な事象である (堀田 2016: 51-52) が、先にも触れたように大母音推移の場合は規模が大きいうえに「速い」変化であったため、非常に大きな影響が出ることになったと言えるだろう。
3. これは日本語の母語話者には最初は捉えがたい区別である。なぜなら日本語では、古英語のように母音の長短のみの違いによって音素を形成しているという直感があるからである。逆に、英語の母語話者には音の長短 (量) のみでの母音の識別に困難を感じる。英語母語話者の日本語学習者は「ここ」「高校」や「おばさん」「おばあさん」の識別がなかなか上手くできない。
4. いわゆるオーストラリア英語には Cultivated, General, Broad の 3 つの社会方言があるが、本稿では Trudgill and Hannah (2017: 25) に従って Broad の母音を記述しており、IPA 表記も同文献のものをそのまま利用している。
5. Haspelmath (2014: 198) は、言語をまとまりのある体系(coherent system)としての性質を持つものと捉える構造主義の知見は機能主義的言語学(functional linguistics)や競合関係にある動機(competing motivations)に関する研究ではあまり顧みられない傾向にあると指摘している。しかし、後述のように構文のレベルで

は早くから Lakoff (1987) が言語の体系性を重視した捉え方の重要性を指摘しているし、音韻レベルでは母音体系の性質についての研究は Trudgill (2011) 以外にも豊富に見られる。

参考文献

Crystal, David (2018) *The Cambridge Encyclopedia of the English Language, 3rd Edition*.

Cambridge: Cambridge University Press.

Diessel, Holger (2019) *The Grammar Network: How Linguistic Structure is Shaped by Language Use*. Cambridge: Cambridge University Press.

Haspelmath, Martin (2014) “On System Pressure Competing with Economic Motivation.”

In Brian MacWhinney, Andrej L. Malchukov and Edith A. Moravcsik (eds.) *Competing Motivations in Grammar and Usage*, 197–208. Oxford: Oxford University Press.

堀田隆一 (2011) 『英語史で解きほぐす英語の誤解—納得して英語を学ぶために』
東京：中央大学出版部.

堀田隆一 (2016) 『英語の「なぜ？」に答える はじめての英語史』 東京：大修館書店.

市河三喜・松浪有 (1986) 『古英語・中英語初歩』 東京：研究社.

Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: Chicago University Press.

Lass, Roger (2006) “Phonology and Morphology.” In Richard Hogg and David Denison (eds.) *A History of the English Language*, 43-108. Cambridge: Cambridge University Press.

Schmitt, Norbert and Richard Marsden (2006) *Why Is English Like That?: Historical Answers to Hard ELT questions*. University of Michigan Press ELT.

Trudgill, Peter (2011) *Sociolinguistic Typology: Social Determinants of Linguistic Complexity*. Oxford: Oxford University Press.

Trudgill, Peter and Jean Hannah (2017) *International English: A Guide to Varieties of English around the World, 7th Edition*. London and New York: Routledge.

